

横浜国立大学大学院 教育学研究科
教育相談・支援総合センター研究論集
第20号 2020年

Journal of Psychotherapy, Educational Consultation and Support Center
Yokohama National University
No.20

精神分析学黎明期における女性性理論の構築に
貢献した女性精神分析家たちの後進への影響

横浜国立大学教育学部

井上 果子

The Contribution of the Early Period Female Psychoanalysts
to the Construction of the Femininity Theory

精神分析学黎明期における女性性理論の構築に 貢献した女性精神分析家たちの後進への影響

井上 果子

Kako Inoue

**The Contribution of the Early Period Female Psychoanalysts
to the Construction of the Femininity Theory**

精神分析学黎明期における女性性理論の構築に貢献した 女性精神分析家たちの後進への影響

The Contribution of the Early Period Female Psychoanalysts to the Construction of the Femininity Theory

井上果子

昨今「女性性」は、精神分析学に留まらず、社会学や女性学など多領域の専門家によって、議論が重ねられている。「女性性」は、精神分析学の初期から扱われ、当時の女性精神分析家による議論や著作は、現在に至っても多領域で議論されている。つまり、精神分析理論において女性性に関する理論が発展してきた歴史の全貌をつかむことは、女性を理解する上で必要不可欠といっても過言ではない。

本稿では、精神分析の黎明期で活躍した女性精神分析家を紹介し、フロイトの時代を中心に現在に至るまでの女性精神分析家が著した「女性性」に関する影響力のある学術論文を概観する。さらに、女性性の見解および女性精神分析家の立ち位置が、それぞれの時代精神の影響を受けていることを明らかにしていく。

女性性に関する学術的な発表や運動には、歴史的に大きく四つの波がある(Wyre, 2009)。筆者は、この四つの波には時系列的な区分に加え、地理的な特徴が伴っていると考え、各波を以下の区分名とする。

第一の波は、ニュージーランド及びヨーロッパを中心に広がった「黎明期」

第二の波は、ヨーロッパ及び北米を中心に活動が広がった「論争期」

第三の波は、ラテン系言語圏の諸国を中心に世

界中に広がって多様化した「共有期」

第四の波は、弱者やマイノリティが沈黙を破り権利の平等や差異の受容を主張した「発言期」

1. 第一の波：黎明期

第一の波は、歴史的には19世紀末から始まる。世界ではじめて1893年にニュージーランドで女性選挙権が認められ、この女性選挙権の獲得が他の国々にも影響を及ぼし始めた時代である。精神分析学では、フロイトが生きていた時代である。

フロイトは1901年の終わり頃から、毎週水曜日に精神分析学に関心を抱く仲間を誘い「水曜会(Wednesday Evening Psychological Meeting)」という私的な勉強会を開始した。創設時に誘われた4名の男性には、フロイトの自宅でフロイトの妻からお茶や茶菓子が振る舞われ、人類の未知なる無意識の世界を垣間見る優越感を味わいながら熱く討論して過ごしていたようである。この勉強会への参加希望者は徐々に増えたが、女性が参加を認められるまで、ミソジニーとの闘いがあった。なお、第一の波は3つの時期に分類できる(Thompson, 1987)。第1期(1902~1909)は、この勉強会が「水曜心理学協会(Wednesday Psychological Society)」と正式に名付けられた1902年から、徐々にメンバーが増え、ウィーン精神分析協会(Vienna Psychoanalytic Society)と1908年4月に名称変更され、20名の会員で構成された時期を指す。同年にザルツブルクで開催され

た、第一回精神分析学会には42名の参加者が集まった。第2期(1910~1919)は、私的な勉強会から国際的な組織へと変貌していった時期を指す。1910年にニュルンベルクで第二回精神分析学会が開催され、Sandor Ferenczi(1873-1933)の提案で国際精神分析協会が設立され、Carl G. Jung(1875-1961)が会長となった。その時点からウーン、ベルリン、チューリッヒの各地で行われていた勉強会は、各地の「協会」と位置づけられ、そこに参加していた者は協会のメンバーとして承認された。その数年後、ヨーロッパの5地域および米国の3地域に協会が設立された。第3期(1920~1930)は、各地域の協会がさらに増え、14地域に精神分析協会が設立された時期を指す。

この第1期以前に精神分析学に関わった女性がいた。後に作家となったEmma Eckstein(1865-1924)である。彼女は、多くの書物で最初の女性精神分析家であると紹介されている。また、フロイトの最も重要な患者の一人でもある。彼女への治療は1892年から1897年頃まで継続し、フロイトを誘惑理論 seduction theory や事後性 deferred action の理論化に導く源となった(Masson, 1984)。短い期間ではあったが、後に、Eckstein自身も精神分析家となり治療を行っていた。1897年頃のことである。フロイトは、彼女に患者を紹介していた(Borch-Jacobsen, 2012)。Silva & Espirito Santo(2015)によれば、彼女はフロイトの次に精神分析を行った人物である可能性が高い。彼女は「白昼夢」について探求し精神分析理論の構築に貢献していた。

第1期においては精神分析に関わった2名の女性がいた。医師のSophie Erismann(1847-1925)およびMira Oberholzer-Ginburg(1887-1949)である。彼女たちは、最も初期の精神分析家と位置

づけられる。二人ともJungの指導を受け、チューリッヒで活動していた。Erismannはザルツブルクの学会に参加しており、1914年までメンバーであった。一方、Oberholzer-Ginburgは、フロイトに自身の患者が見た夢資料を提供し、子どもの心理療法を開拓した一人であった。なお、彼女たちは「水曜会」には参加していない。

その頃からフロイトは、女性性について満足のいく理論を打ち立てられず、女性の心理を「謎の多い暗黒大陸」「入り込めない暗闇のヴェールに包まれている」と捉えていた(Freud, 1926)。後に彼は「女性は何を欲しているのか what do women want」を問うたが、論文などの学術的な場ではなく、彼の日記の中で、また個人的に、弟子のPrincess Marie L. Bonaparte(1882-1962)に発したとされている(Jones, 1961)。精神分析学最大の謎「女性は何を欲しているのか」に対して、当時の女性精神分析家たちは、執筆した論文を通して回答している。しかし、その回答をフロイトは、理解できなかったようである(McDougall, 2004)。なぜなら、フロイトは75歳を迎えてようやく、女性のセクシャリティーを論文にまとめた(Freud, 1931)が、その時点でも、彼女たちのそれまでの見解について十分に言及することも、積極的に議論を進めることもなされていないからである。

フロイトは、自分が解明できない女性性の謎を解明してくれることを望んでか、あるいは、自身のエディプス葛藤をあまりかき立てないためか、彼は多くの女性が精神分析の世界に関わることを歓迎した。

第2期以降には「水曜会」に何人もの女性がメンバーとして認められていった。たとえ、Isidoro Sadger(1867-1942)のように、女性がメンバーに加わることを真っ向から反対する人がいても、そ

の甥のFritz Wittels(1880-1950)のようなミソジニストが何人いても、フロイトは断固としてその主張に同意しなかった。そして1910年4月にPaul Federn(1871-1950)の推薦によってMargarethe Hönigsberg-Hilferding(1871-1942)の「水曜会」への参加が認められ、彼女はウイーン精神分析協会の最初の女性メンバーとなったのである。

Hilferdingはウイーン大学医学部を卒業したオーストリア初の女性医師である。彼女は、当時タブーとされていた女性の母親としての性愛体験について、1911年1月のウイーン精神分析協会「科学会Scientific Meeting」で発表している。彼女はOn the Basis of Mother Loveと題した発表の中で、生得的な母性愛は存在しないことを紹介している。ただ、当時の聴衆は全員男性だったため、彼女のこの主張は彼らには受け入れ難い内容だった。彼女は、その9ヶ月後の1911年10月に、Alfred Adler(1870-1937)が脱会すると同時にウイーンの精神分析協会を脱会している。

女性を、フロイト主催の「水曜会」に会員として歓迎するというフロイトのこの姿勢は、精神分析学が女性を男性と平等に扱う数少ない学問・職業となる事を望んでいたからだと思われる。実際「水曜会」が、その数年前まで露わだったミソジニーを打ち伏せ、ミソジニーの継続を阻止する働きがあったようである。その結果、多くの女性精神分析家が誕生し、彼女たちも女性性の理解や組織の構築や経済面でフロイトの人生に影響を与え、フロイトが提唱する精神分析を支えていった。

チューリッヒから「水曜会」に出席した女性が、ウイーン精神分析協会に認められた2人目の女性医師、若きSabina N. Spielrein(1885-1942)である。1911年10月、ちょうどHilferdingが去る前後のことである。彼女はロシア系ユダヤ人の裕福な家庭の出身で、1904年にJungが勤めていた病院に入

院し、彼との親密な関係が1910年頃まで継続されていたという経緯もあり、フロイトにとっては、スパイのような特使のような存在であったようだ。SpielreinはJungとの関係を乗り越え、医師、精神分析家となり、結婚し、子どもを生み、祖国ロシアに帰国するまでウイーン精神分析協会の女性メンバーであった(Appignanesi, 2008)。彼女は、統合失調症、死の本能、時間感覚の解体などのテーマで論文を書いている。彼女が1912年に発表し、彼女の死後、異なる2つのジャーナルに英訳されたほどの論文で彼女は「聖書では、死からの再生は『母親の子宮』を通して行われる」ことに注目した(Spielrein, 1994)。つまり、この論文で彼女は、女性の子宮がもたらす力を心的に意味づけている。彼女は端的に、去勢は、再生・生殖と解釈できると論じ、その裏付けとして、Victor Tausk(1879-1919)が、性交は去勢であり、子宮によってペニスが切断される、と語った内容を引用している。

Spielreinは、1912年に故郷ロシアに戻り、結婚し、その後ベルリンに移り住み、子どもを産んでいる。彼女は、精神分析学の黎明期に子どもの心理について書いた最初の人物の一人である。子どもの事例にはフロイトのハンス症例、Jungのアンナ症例があり、その次にSpielreinの症例が挙げられる。彼女は1912年から子どもの恥じらいや恐怖症、エディプスや象徴化などに関する学術的論文を10本ほど書いている(Spielrein, 1912; 1913など)。その中には、子どもの絵画から捉えた心理(Spielrein, 1931)についての言及もある。この一連の論文はAnna Freud(1895-1982)やMelanie Klein(1882-1960)の論文より10年も遡っている。Spielreinは1920年にハーグで行われた第6回国際精神分析学会で子どもの言語の発達について発表しており、その年にスイス精神分析協会の会員に認められた23歳のJean Piaget(1896-1980)も、

この発表を聴講していた。それがきっかけで Spielrein は 1921 年から Piaget の教育分析を週 6 日引き受けていた。彼はその後、ベルリンで行われた第 7 回国際精神分析学会で、Spielrein の子どもの観察データに基づいて子どもの思考や象徴的思考について発表している。同学会で Spielrein は子どもの時間の概念の起源について発表しており、それが彼女の 2 度目かつ最後の学会発表となった。Spielrein と Piaget は思考と言語の起源について共に研究を重ね、影響し合っていた。Spielrein は 1923 年に再び故郷のロシアに戻って、二人目の娘を産んでいる。1942 年、ドイツ軍のロストフ侵攻により Spielrein と二人の娘は殺害された。Spielrein は 30 本を超える精神分析学論文を遺し、その内容は精神病や子どもの精神分析についてである (Spielrein, 1913 など)。女性性に関する論文は書いていないが、多くの女性に影響を与え、その後の精神分析学理論の構築に大きく寄与した人物である。そして Spielrein こそ Klein に最も影響を与えた女性精神分析家であり、フロイトに「破壊の本能」を、「飢餓や愛」といった本能と並んで位置づけることを受け入れさせた中心的な人物でもある。

同じ 1911 年にもう一人の女性、若き Tatjana Rosenthal (1885-1921) がウィーン精神分析協会に加わった。彼女は Spielrein と同様にロシア出身であり、チューリッヒで医師となり、精神分析教育を受けてからウィーン精神分析協会のメンバーとなった。彼女は文学にも関心があり (Wermuth-Atkinson, 2012)、例えば、ドストエフスキーの苦悩が彼の書物に及ぼした影響について紹介する (Van der Veer, 2011) など、作家の精神状態の影響について精神分析的理解を取り入れて説明している。その後、ロシアに帰国しサンクトペテルブルクにおける精神分析学を広めたが、あいにく 36 歳の若さで、子どもを一人遺して、自死

している。

ウィーン精神分析協会に認められた 4 人目の女性が Hermine Hug-Hellmuth (1871-1924) である。1913 年 10 月、彼女が 42 歳のときにウィーン精神分析協会の「水曜会」に参加し、1924 年に甥の Rolf に殺されるまで、協会に所属し続けた。彼女を協会に推薦したのは、他にもない Isidoro Sadger であった。彼は Hellmuth の友人であり、甥のことで相談に乗り、彼女の分析家でもあった、と一部の歴史家は記載している (Geissmann & Geissmann, 1992; Silva & Espirito Santo, 2015)。彼女は職業的には教師だったが、ウィーン大学で化学 Chemistry の博士を取得した初めての女性でもあった。彼女が初の児童精神分析家と認められた背景には 1913 年当時、彼女の体系化した児童観察は、フロイトの理論を裏付けるために協会にとって重要な意味があったからでもある。フロイトは、彼女が協会に入る以前から彼女の仕事を認め、娘 Sophie の子育ての助言者として Hellmuth を推薦していた。ただ、彼女は科学的な研究方法を重視していたと考えられる。具体的には Granville Stanley Hall (1844-1924) の A Study of Anger の影響、特に Hall と Alexander C. Ellis (1871-1948) の Study of Dolls の影響を受けていた。研究者としての Hellmuth は「水曜会」で初めての発表でも自由連想法に基づく事例研究ではなく、実証的な研究を重視した Hall の研究成果に関連する内容を取り扱った。彼女は、フロイト理論を取り入れて 5 歳の男児の夢の分析や子どものエディプス葛藤などについてまとめているが、それらの知見は精神分析治療からでなく直接観察によるものであった。Hellmuth は、この直接観察から子どもにはプレイセラピーが有効であると確信し、1920 年にハーグで開催された第 6 回国際精神分析学会で発表した (Hellmuth, 1920)。その発表の場には Anna Freud および Klein も参加してい

た。

ウイーン精神分析協会に認められた5人目の女性はポーランドの裕福な家庭出身の Eugénie K. Sokolnicka (1884-1934) である。彼女は、フランスに子どもの精神分析療法を導入した女性としても知られている。Sokolnicka は子どもの頃、フランス人の家政婦からフランス語を学んでいたため、ソルボヌ大学に入学し、そこで生物学の学位を取得した。同時期に College de France で Pierre Janet (1859-1947) の心理学の講義を受けていた。1911年頃にチューリッヒに移り住み Jung の下で精神医学のトレーニングを受けている (Groth, 2015)。後に Jung が精神分析から去ったとき、彼女はフロイトに自身の教育分析を依頼した。フロイトは Spielrein と同様に、彼女を歓迎したようである。1914年から「水曜会」に誘われ、1916年にはチューリッヒの精神分析協会のメンバーとなり、さらにはウイーン精神分析協会のメンバーにもなった。その後、彼女は Ferenczi の分析を受け、彼がフロイトの指導を受けるためのコントロールケースの対象となった。そのため Ferenczi はフロイトと、彼女に関する議論を交わしていた。フロイトは癩癪持ちの彼女を嫌っていたようだが、パリに移住した際「新フランス評論 Nouvelle Revue Francaise」という名高い文芸雑誌の関係者に彼女を推薦している。Sokolnicka はパリで Rene Laforgue (1894-1962) や Eduourd Pichon (1890-1940) をはじめ、何人もの男性医師のアナリストとなり、フランス精神分析の礎を築いた。彼女が書いた強迫神経症を患う子どもの治療に関する論文 Analysis of an Obsessional Neurosis in a Child (獨1920、英1922) では、子どもとの治療で「疾病利得」を扱い、短期で治療効果を上げた成果が論じられている。彼女は、子どもの治療を自身のアナライザン達にも伝授していた。Sokolnicka は晩年、経済的窮地の中、自死

している。Sokolnicka のアナライザンダの一人、医師の Sophie Morgenstern (1875-1940) が引き継いで、フランスにおける子どもの治療のパイオニアとなり、子どもに描画を取り入れた精神分析治療を行った (Morgenstern, 1939)。その Morgenstern も自死した。ナチス占領直前のことだった。

ウイーン精神分析協会に認められた6人目の女性は Sokolnicka と同様に、ポーランド出身の Helene R. Deutsch (1884-1982) である。彼女は、1916年にウイーン精神分析協会への入会をフロイトに依頼し、1918年に認められた。彼女は、The Psychoanalysis of the Sexual Function of Women (1925) の著書で、早期関係性における母親との一体化、その後の母親への同一化、そして、思春期・青年期における女性性の発達、女性における初潮や閉経や生殖機能の内的な意味づけ、女性のセクシュアリティ、母性性の意味など、女性の生涯の重要な転換期について精緻に論考している。これは、女性性について議論される内容がほぼ全て網羅しており、現在に至っても重要な著書である。

しかし、フロイトが Deutsch のこの本の重要性をどこまで意識していたかは定かではない。この本は、フロイトにとって受け止めやすい表現になっているにもかかわらず、十分に理解できていたとは考えられない。なぜならフロイトは、その6年後の1931年に自身の論文 Female Sexuality で、Deutsch の1930年の論文 Female Masochism and its Relation to Frigidity は認めていたものの、Deutsch の1925年の論文は認めていないからである。Deutsch が論じている女性のセクシュアリティについてフロイトはほとんど言及しておらず、「彼女が前エディプスにエディプススキーマを当てはめようという試みに“まだ”影響されている」といったやや批判的な指摘に留まっている。しかし、フロイトは女子が生物学的に歩む女性性

の発達については言及できていない(Schafer, 1974)。さらに、自身の論文でフロイトは男児と母親の関係から議論を始めているが「母親とのアタッチメントは、とらえどころがなく、かすんだ関係」といった描写に留まっている(Freud, 1931)。その背景には、フロイト自身に多大な影響を与えた母親が亡くなって数ヶ月後にこの論文は書かれており、そのモーニングも含んでいることが推察される。このように、フロイトの母親への葛藤および女性性を理解できない焦りが垣間見られる。Young-Bruehl (1990) は「フロイトが Female Sexuality の論文を、闘争的で無愛想に、そして苛立って書いている」と述べている。

Deutschがフロイトに抱いたと考えられる違和感は、彼女が協会に認められて約半年経った頃、彼女よりも5歳年上で、彼女よりも9年前(1909年)に協会に認められていたTauskの分析を引き受けるよう依頼されたことにある。彼女にとってTauskは“先生”であった。Deutschが1911年に初めて精神分析を学んだとき、Tauskは「夢分析」セミナーの講師であった。それにもかかわらず、フロイトはTauskに、教え子で、かつ後輩的存在である、女性のDeutschから分析を受けるように推薦した(Eissler, 1974)。オーストリアでようやく女性が選挙権を得た1919年のことである。Tauskには屈辱であったに違いない。フロイトの要請にDeutschは最初戸惑ったようだが、Tauskを初めてのクライアントとして引き受けている。彼女はTauskとの面接を重ねるうちに、彼の類いまれな能力に魅了され、そのことを自身のフロイトとの分析の中で話している。それによりTauskに対するフロイトの葛藤はますます高まったようである。そこでフロイトはDeutschに、自分との分析を中断するかTauskの分析を中断させるか選択を迫り、Deutschは後者を選択している。その後、Tauskは自死した。

DeutschにとってTauskの死は衝撃であったであろう。ただ、フロイトとの関係が緊迫しても、Deutschは彼に反論せず、1923年にはKarl Abraham(1877-1925)の分析を受けに一人ベルリンを訪れるなどして、フロイトと適宜距離を保ちながら、精神分析への理解を深めていった。その成果が1925年の著書The Psychoanalysis of the Sexual Function of Womenにつながったのである。そして、この本が刊行された同年に、彼女はウィーン精神分析トレーニングインスティテュートの初代会長に就いた。そして、その10年後に北米に亡命し、精神分析家として引き続き活躍する人生を送っている。

第2期で、ウィーン精神分析協会に認められた6名の女性達の中には、フロイトがウィーン大学で神経学を教えていた1886~1887頃の受講者たちがいた。Hilferding、Hug-Hellmuth、Deutschである。彼女たちは学生時代からフロイトとは顔見知りであったのだ。

第3期に入ると、ウィーン精神分析協会のメンバーとして承認される女性はますます増えていった。1922年にAnna Freudは同協会のメンバーとして認められた。彼女は、以前から「水曜会」に出入りしていたという記録が残されている。

同1922年にLou Andreas Salome(1861-1937)が同協会のメンバーとして認められた。Anna Freudが入会を認められたちょうど1週間後のことである。彼女は1911年頃からフロイトと交流はあった。その経緯は以下のものであった。彼女の著作は当時のドイツの知的層には知られており、彼女は知的女性としてのレジェンドであった。彼女の小説を出版業界にいたHugo Heller(1870-1923)は事前にフロイトとその側近に発表していた。その2週間後にワイマールで開催された国際精神分析学会にPoul Bjerre(1876-1964)に

伴って、Salomeは参加した。そこで彼女は初めてフロイトに出会ったのである。フロイトのほうに先に彼女の魅力の虜になった。彼女の方も、人間の深層を理解する精神分析学の虜になった。ワイマールでの学会の後、彼女は約半年間、独学で精神分析を勉強し、フロイトの許可を得て1912年の10月から1913年の4月までフロイトの講義を受けていた。そのためにウイーンを訪れている。そのときAbrahamは、「Salomeほど深くかつ鋭敏に精神分析学を理解する人物に会ったことがない」と讃えている。彼女は、フロイトが毎週土曜日の午前中に精神科クリニックの講義室で開催していた「精神分析理論」の講義を受け、「水曜日」にはプライベートに依頼して参加が認められていたのである。その会ではフロイトにも出席者にも受け入れられ、心地よい集団であった、と本人は回想している。また、このときにTauskと出会い、18歳ほど年下の彼と惹かれ合い親密な関係になり、彼の二人の息子とも仲良くなった。フロイトの講義をさぼり、二人で映画に行った事もあったようだ。Salomeは、その後、フロイトの生涯の友人にもなった(Vickers, 2008)。ウイーンを訪れたときにはホテルではなく、フロイト家に泊まっていた。二人の間には200通以上の長い手紙のやりとりがあったようである。

Salomeは教育分析を受けた経験はない。当時の女性精神分析家は、おそらくほぼ全員、教育分析を受けていたので、彼女が未経験を貫いたことはめずらしかった。フロイトに出会う前からSalomeは、女性性の問題を自身の著書で扱っており、自身の体験や観察に基づいたフィクション作家としての実績があったからであろう。

彼女は、女性が築く新たなアイデンティティの表明が、女性の生活や欲求や自己イメージを変えられるとは、考えていなかった。Salomeは女性性の運動が意見の対立、混乱、葛藤、そして男女

間の怒りをもたらすことを懸念していた。さらに彼女は、新たな女性のアイデンティティを早急に形成することで、自由や自己充実感を安易に築くことにはならない、と強調していた(Livingstone, 1984)。つまり、彼女は、住居などの移動に伴う関係の変化や、周囲とのアイデンティティのネゴシエーションこそ、最終的に、女性性の理解と確立につながる、と発信し続けていたのである。そして、フロイトに、女性のセクシュアリティにもっと関心を向けるように影響を与えつけた。しかし、フロイトの女性性に対する理解を深めたいという思いは満たされず、自身の理解の限界が混乱や葛藤を招いていた、と筆者は考える。

Salomeは、Friedrich Nietzsche(1844-1900)やRainer Maria Rilke(1875-1926)など多くの男性と親密な関係を持ち、精神分析内の多くの男性を魅了し、彼らとも親密な関係をもった魅惑的な女性であったようである。後のフェミニスト達は、Salomeの著作物と彼女の生き方の差異を指摘している。社会的にも異性関係においても彼女の自由な生き方はフェミニストたちの指針ともなった。一方で、彼女の一部のエッセイに登場する保守的な女性是对照的な姿で描写されており、フェミニスト達の批判の的となったのである。Salome本人は、一貫してフェミニズムを批判していた。以上のように、Salomeの生き方やその生き方に至る彼女の思考と、著作に登場する女性達に反映された女性像は対照的である(Cormican, 2009)。Salomeを批判する立場からみると彼女は自己矛盾に陥っているように見えるであろうが、この差異こそが、女性の無意識の複雑さを洞察した彼女の思索力の賜物である、と筆者は考える。

ウイーンの精神分析社会から地理的に離れたベルリン精神分析インスティテュートが1920年にドイツで設立された際、設立時メンバーの一人に女性医師Karen Horney(1885-1952)がいた。その

組織は、収入の低い患者達にも精神分析療法を受けられる機会を設けていた。精神分析療法の提供の特権階級に留めない組織とするために運営費の10%が患者からの治療費で、残りはMax Eitington (1881-1943)の資産から賄われていた。Eitingtonの貢献は経済面に留まらず、1922年にまとめた報告書には、精神分析家は、自身が教育分析を受けずにして、精神分析を行ってはならない、と記載されている。彼はこの報告書で、理論の講義/研修・教育分析・スーパーヴィジョンという3本柱、Eitington Modelを提唱しているが、これが現在の体制の基準へと導いた。

当時のベルリン精神分析インスティテュートで精神分析家を志す者は、構造化されたこのモデルに守られて教育を受けていた。その環境にいたHorneyは、医学部生だった1910年にKarl Abrahamの分析を受けている。ウィーンではなく、ベルリンに所属していたからこそHorneyは自由に発言でき、フロイトが女性のペニス・エンヴィーについて取り上げていた時代に、フロイトのその考えに、最初に正面から反論できたのであろう。1922年にベルリンで開催された第7回国際精神分析学会で発表した際、彼女はフロイトの前で、女性性の形成にペニス・エンヴィーは中核にあるとされているが、それはむしろ、女性性の逸脱した発達であると断言し、女性のペニス・エンヴィーをことごとく論破した。彼女はさらに「男性には、子どもを産む機能がない、という現実を補うために、子宮エンヴィーで悩む」と発表している(Horney, 1922)。その時の彼女の論駁にフロイトは沈黙を貫いた(Balsam, 2015)。当時はあまりに唐突かつ衝撃的で、彼の理解が追い付かなかったことが推察される。

フロイトは後に、Horneyが指摘する子宮エンヴィー(Horney, 1926)は、自身がペニス・エンヴィーを抱いている結果である、と反論している。

さらに、女性精神分析家が、ペニスを手に入れたという自身の強烈的な願望を充分理解していなければ、患者のそのような願望の重要性の理解にしくじる、と語っている(Freud, 1938; Schultz & Schultz, 2009)。ただ、Horneyは、女性には男根よりも、ヴァギナや子を授かりたい願望やオルガスムの願望の方が重要である、と提唱し続け、1932年に3人の娘と北米に移住している。Horneyのようにフロイトを論駁すれば、たとえウィーンから離れたベルリンで分析を開始し、アメリカに亡命後シカゴやニューヨークで精神分析家として教育や治療に専念しても、その論駁の影響は継続され、最終的には精神分析協会から脱会せざるを得ない時代でもあったのである(Balsam, 2015)。

Horneyのフロイトへの関わり方は、Salomeと真逆であったが、二人は共通して、居住地も含め移動が多く、また多くの男性との交じり合いから、当時の男性の本質的な考え方、そして、彼らの女性の捉え方を見抜いた運動家たちであった。また、HorneyはDeutschとも異なり、フロイトとの違いを言語化して主張していた。しかし、両者は共通して、女性性をその時代精神のなかで理解しながら、自身の見解を論文化して、自分たち女性の見解が次世代には理解されることを期待していた、と筆者は推察する。

フロイトは、女性のペニス・エンヴィー理論を重視した。このエンヴィーを確信したきっかけは、フロイトが詩人Hilda Dolittle(1886-1961)に精神分析療法を(Jonesによれば1933-1934に行ったことにある(Richards, 1992; 2019)。フロイトはDolittleのバイセクシュアリティを認め、それを貫くことを推奨した。フロイトの治療が作家としての活躍に影響を与えた、とDolittle自身が、著書Tribute to Freud(1956)で紹介している。フロイトは、彼女の治療経過から、女性のペニス・

エンヴィーを確信したのである (Friedman, 2002)。

Ruth Jane Mack Brunswick(1897-1946)はシカゴに生まれ、米国で精神科医となった1922年に、フロイトの下で精神分析を学びながらフロイトの分析を受けるためにウイーンに移住している。彼女は晩年モルヒネ中毒を患いながらもウイーンのユダヤ系精神分析家が米国に亡命する手助けをしている。

フロイトは Brunswickに1938年頃まで精神分析を行っていたようだが、彼女は1930年にはウイーン精神分析協会のメンバーに加わっている。Brunswickを精神分析の治療者として一目置いていたためか、フロイトは自身の患者の一人である「狼男」の症例となった男性の治療を、彼女に引き継いで欲しいと依頼している。彼女はフロイトに女性のセクシュアリティについて多くの示唆を与えた弟子の一人となり、彼と討論する身近な存在となっていた。Silva & Espirito Santo(2015)によればBrunswickは、女兒と母親の關係に着目し「プレ・エディプス」という用語を提唱した人物である。彼女はフロイトが提唱する幼児期の性的發達は女兒も男児と同様であるという見解には同意していた。

オランダ人精神科医 Jeanne Lampl-de-Groot (1895-1987)は、1922年からフロイトの下で3年間学び、フロイトや娘 Anna Freudと親しくなり、その後も交流を深めていった。彼女はフロイトから学んだ後、彼の推薦で、さらに研鑽を積むために1925年から8年間ベルリン精神分析インスティテュートで過ごしている。再びウイーンに戻り、ウイーン精神分析協会のメンバーとなった後、オランダに帰国し、伴侶と共にオランダ精神分析インスティテュートの發展に奮闘し、後進を育てている。

Lampl-de-Grootの最初の論文(1928)は、成長

過程にいる女兒のエディプスコンプレックスについて論じており、晩年にもそのテーマを推敲している (Lampl-de-Groot, 1982)。彼女はフロイトの理論を独自に補足し、フロイトの女性性に関する論文の代弁者でもあった。Lampl-de-Grootは1933年の論文でHorneyに対してやや批判的な見解を示し、女兒が子宮を活用するのは、かけ離れて遠い将来のことだが、男児がペニスを活用するのは、尿の排泄の際や、顕示欲求を満たすために、幼いときからであると主張した。彼女のこのロジックは、フロイトを安堵させたと推察される (Springmann, 2018)。

フロイト(1931)は、女性の治療において女性患者からの転移を受けたときに、DeutschやLampl-de-GrootやBrunswickの方が母親代理となりやすいため、男性分析家よりも簡単に理解できる、と弁明している。フロイトはLampl-de-Grootへの手紙で“I am not a feminist”と断言しており、男性優位をほめかしていた。しかし、彼は新しい知見に發展的に取り組む姿勢も示していた。独断的にならないように慎重になっていた側面が垣間見られる。フロイトに直接教育を受けた DeutschやLampl-de-GrootやBrunswickは、女兒の精神性的發達や女性のエディプス・コンプレックスについてフロイトと議論を重ね、フロイトが理解を深めるための協力をしていた。彼女たちは、彼の女性性に関する理解の狭さを把握していたと想定され、その上で、フロイトが当時掲げた女性性に関する理解に、おおむね従ったのであろう。彼女たちは、反論を避けながら、自身の女性性の理論を構築していった、と筆者は推察する。

Joan H.V. Riviere(1883-1962)も、フロイトと良好な關係を維持しフロイトに感謝されながら女性性についての理論を展開した人物である。彼女は大学には行っておらず、17歳の時に1年間ドイツ

で過ぎドイツ語が堪能となった。23歳の時に弁護士と結婚しており、1916年33歳の頃にErnest Jones (1879-1958)の分析を受け、1919年にJonesがロンドン精神分析協会から英国精神分析協会に名称変更した際に、Riviereはメンバーの一覧に加わっている。その直後からフロイトの著作の翻訳を手がけており(1917~1930)、1922年には彼に分析を受けている。フロイトはRiviereの精神分析への理解の深さに感銘を受け、彼の著作の翻訳者としての立場に留まらず、彼女に精神分析家となって自身の理解を発信していくことを助言している。Riviereがその助言を受けた1920年代は、世の中が徐々に女性性について言及しはじめた頃でもある。やがてRiviereは自身の体験も含めたWomanliness as a Masquerade (1929)を書き上げている。彼女によれば、偽りのない女らしさには、ごまかしがないおやかさがある。女性的満足は、早期口唇期的衝動と関連するサディズムの減少と、衝動がもたらす不安への取り扱い能力にあると述べている。

また、Riviereはイギリスのエリザベス女王1世を事例として取り上げた1冊の本を批評した。その批評の中に、彼女は女王が幼いプリンセスだった頃に、継母の2人目の夫から性的な誘惑を受けた体験はプリンセスに性的トラウマをもたらしたと論じ、その時代の性被害の存在について触れている(Riviere, 1922)。また、Riviereは、女兒が内的母親から攻撃を受ける恐怖を論じたKleinの影響を受け、Kleinの理論の本質を代弁する卓越した能力があった人物でもある。

ナポレオン一世の弟を曾祖父に持つPrincess Marie Bonaparteは、精神分析における女性性の理論を構築したもう一人の人物であり、さらにフロイト家および精神分析学の歴史的資料を守った救世主でもあった。彼女は、25歳の時にギリシア王の息子と結婚している。強迫神経症を患った

め42歳からフロイトの治療を受けはじめた(Bertin, 1982)。やがて精神分析家になり、フロイトが最も信頼し、頼れる弟子の一人となっていった。

彼女は、フロイトが若き時代にFliessに宛てた手紙や、忘れ去られていたProject for a Scientific Psychologyなどの貴重な原稿が市場に売り出されている情報を入手すると、即座に買い取っている。老いたフロイトは、それらの資料を焼却することを強く望んだが、彼女には、その意向を背いても資料を後世に残す歴史的な重視性を理解する眼力があった。彼女は、それらの資料を戦時下で安全に保存するために、自身の外交権を行使しナチス占領下のウイーンから、中立国の大使館に移したのである。

Bonaparteは、晩年のフロイトのイギリス亡命を準備した中心人物でもあった。彼女によってフロイト家、特にAnna Freudがナチスに命を奪われずに済んだといっても過言ではない。さらに、彼女は、フランス精神分析を築いた一人でもあった。彼女は多くのユダヤ系精神分析家の亡命に尽力しただけではない。その実行力に加え、ノーブルな精神が多くの仲間から慕われ、感謝された精神分析家であった。

偉業を成し遂げたBonaparteは、論文を多数書いている(Bertin, 1982)。彼女は、女性におけるバイセクシュアリティを、性欲機能、生体心理的機能、進化論的視点も含めて議論しており、心理的な問題を扱う視野の広さを持ち合わせていた(Bonaparte, 1949)。

BonaparteはHorneyと同様に、男性の女性に対する恐れについても触れているが、フロイトは「彼らには理由がある」といった男性の立場を擁護する返答をしている。フロイトは、女性精神分析家こそ、女性の「謎の多い暗黒大陸」のような内面に理解の光を当ててであろうと指摘してお

り、その指摘に応えるように、当時の複数の女性精神分析家たちは、女性性について論じている。しかし、フロイトは晩年になっても、その本質を理解できず、女性は倫理面で劣って、消極的で、嫉妬深く、空虚であるという見解を述べている。彼は、自身の女性性の理解の狭さ、見解が断片的かつ不完全で、必ずしもフレンドリーなものではないと認めている。彼はさらに、女性性について探求したければ、各自の人生経験に問いかけること、あるいは詩人に問いかけること、あるいは科学がより深遠なより筋の通った説明ができる日を待つように、と発言している(Freud, 1931)。フロイトのこの発言は、ややなげやりのにも捉えられかねなく、彼の時代に生きた女性達と同様に、女性性についての議論は次世代に託した、と筆者は考える。

後に、フロイトの孫 Sophie Freud (1924-) は、フロイトのことを「彼の時代の男性である」そして「自身の理論の中では女性を二次的な対象として捉えていた」と率直に語っている。Sophie によれば、フロイトの女性理解の限界は、彼が生きた時代背景に起因する。しかし、時代背景でのみ説明することはできないと考えられる。なぜなら、同時代の Jones、Ferenczi らは、Horney の見解に賛同していたからである。フロイトの女性理解の限界の背景には、彼の母親が結婚に至った複雑な環境と、それに伴った彼女の葛藤を彼が幼い頃に無意識的に読み取り、晩年になってもその母親の葛藤がフロイト自身に与えた影響について、十分に自己分析できずにいたことが起因している、と筆者は考える。フロイトは生涯、自身の母親を女性として分析しなかったという盲点が、彼の女性性の理解の弊害となったと考えられる。

第一の波は、女性性の理解の黎明期でもある。この時代に精神分析協会のメンバーとして留まった者は、フロイトの理論の範疇から飛躍すること

は難しかったと考えられる。Rosemary Balsam (1940-) によれば、フロイトを取り巻くウイーンのサークルで討論されていた現代思想という仮面をかぶった精神分析学理論には、女性をあからさまに価値下げした思考が含まれていた(Balsam, 2015)。このサークルで男女は平等ではなかった。精神分析家となった女性は、ほぼ全員が現在で言う教育分析を受けていたか、あるいは男性精神分析家の治療を受けた女性クライアントたちであった。ところが、男性精神分析家は必ずしも全員が教育分析を受けていたわけではない。男性の場合、教育分析経験者は半数以下であった(Mühlleitner & Reichmayr, 1997)。精神分析に関わった当時の女性たちは、自ずと自身の生活や人生が周囲に露呈され、精神分析理論構築の素材として結果的に搾取される犠牲を払っていた。現代であれば複数のハラスメントに該当する行為が、男性精神分析家によって無自覚に行われていたのである。

それに拮抗して当時を生きた女性精神分析家の精神力も垣間見られる。自身の人生も、男性による女性の捉え方も、女性性の理解につなげていた。女性性に関する自身の考えや理論的信念を、たとえ脱会をしても、させられても、貫いた Hilferding や Horney たち、フロイトの男根至上主義を適宜盛り込みつつ、自身の女性性に関する考えを論文の中で主張し続けて、フロイトに目立った反論を示さなかった Deutsch や Riviere や Lampl-de-Groot や Bonaparte たち、立場上フロイトの考えのスポークスマンになっていた Anna Freud、そしてフロイトに女性性の理解を深めさせようとしながら、将来を見据えていた Salome がいた。彼女たちは皆、フロイトには女性性の理解に限界があることを把握していたであろう。異なる立場から女性性の理解を深め、その課題に向き合ったのが、この第一の波を築いた女性精神分

析家たちであった。

2. 第二の波：論争期

第二の波は、歴史的には第二次世界大戦後しばらくしてから1970年後半頃までを指すと考えられる。この第二の波が訪れる直前に、何人もの精神分析家がアメリカに移住していた。たとえば、1932年にはHorneyと娘3人はアメリカの東海岸に移り住んでいる。またその後Deutschらユダヤ系精神分析家たちが家族と亡命している時代である。

第二の波は、女性性の学術的な理解が進んだ時代でもある。女性運動が開始された米国でHorneyの女性性理論は、フェミニストの立場を代弁していると捉えられ、運動家たちに受け入れられ、高く評価された。ところがDeutschの女性性の理論は、その逆で、フェミニストの怒りをかい、同じ女性を裏切っている、と捉えられた(Brownmiller, 1975)。ただ、Deutschは、男性と女性の避けられない違いを主張しているだけで、どちらかが劣っているという議論はしていない。

この時期、女性および女性性に関する理解には男女間でも、さらには男性の間でも、今より遙かに温度差が存在していた。たとえば、Ernest R. Groves (1877-1946)は当時、女性の地位が改善され、男性の地位とほぼ同等であると指摘している(Groves, 1944)。彼は、男性の立場からそれまでの米国女性の地位と比較して改善されていることを指摘しており、実際女性がどう捉え、何を望んでいるかは想定していなかったようだ。しかし、Gregory Zilboorg (1890-1959)による同年の論文では、フロイトの男性優位主義は偏見を助長させ、フロイトは母系制度や女性に対する男性の敵意などの問題を認識はしていたが、議論できずにいた、と考察している(Zilboorg, 1944)。さらにZilboorgは「男性には父性が育つ。男性が子ども

を宿せる母親になれたとしたら最強であっただろう。なぜなら、父性は母親への同一視からもたらされるから」と指摘している。そして女性のペニス・エンヴィーよりも、男性の女性エンヴィーのほうが精神発生的に古く、より基本的である、とも指摘している。

この頃はアメリカでもヨーロッパでもKleinらが提唱した母子関係やその視点から捉えた女性性の理解が中核となった時代である。つまり、男児も女児も発達早期には母親をまず求めることが強調された。Kleinらの理解は、確実にSimone de Beauvoir (1908-1986)ら多くのフェミニストや女性性を探求している精神分析家たちに、広範囲に影響を与えていった。そのBeauvoir (1949)は神話を例にして、男性が女神のように母を絶対的な他者として位置づけることで距離を置く必要性や、男性が母親に対する鎮圧された恐怖を抱くと述べ、フェミニズム運動の先駆者となっていった(Beauvoir, 1949)。

ただ、世の中は、まだ男根至上主義の影響下にあった。発達段階における男根は過大評価され女性器は存在すら否定され、男根は乳房と結びつけて部分対象として捉えられていた(Stein, 1961)。Steinによれば、男根過大評価を下すことで男性は、母親と距離を保つことが可能となり、それは彼女との融合の危険性を断ち切るための防衛手段であった。彼は、男性が母親を含む女性の女性性を否認し、男根的母親を否認することは、母親との融合願望を防衛するニーズの副産物である、と捉えていた。

なお、1960年代の後半は、アメリカのフェミニストたちが父権的で権威的な精神分析を批判していた時代でもある。しかし、家族に関連するテーマ、特に母-娘の関係に関心が向けられたため、同じ精神分析でも、対象関係論には好意的であった。対象関係論はアメリカのフェミニズムを代弁する

理論の源として引用されるようになった。ただ、1970年代半ばになると、批判の勢いも穏やかになり、精神分析的なフェミニズムを築いていくことに注目が向けられ、後に、「ジェンダーアイデンティティ」と呼ばれる「ジェンダーの社会的構成」の探求に注目は向けられていった。

第二の波の終わりの頃のアメリカで、Nancy Chodorow (1944-) が、ジェンダーについて精神分析学及び社会学の視点から執筆した著書 *Reproduction of Mothering* は大きな反響を得た (Chodorow, 1978)。同書は伝統的な精神分析の理解に疑問を投げかけ、後の多くのフェミニストたちに引用された (Young-Bruehl, 1998)。彼女は、伝統的な精神分析では女性のマザリング=育児に対するもがきや努力についての言及がないことを提起した。さらに、それまでほとんど議論されてこなかった女性のマザリングが、何世代にもわたって再生されているという知見を明らかにしている。その後も Chodorow は著書の中で、社会・人類学出身の精神分析家として、母親の影響に焦点を当て、女兒は母親との自己愛的一体感を体験すると述べている。彼女によれば、母親は娘を他者として捉えるというよりも、母親の延長線上に母親の複製として娘がいる、という母娘の関係性がある。この一体感は、同性の友人との親密な連帯感へと移行して継続され、同性の友人によってようやく母親との自己愛的な一体感から逃れられるようになる、と彼女は指摘している (Chodorow, 1989)。その反面、母親は息子を当初から“他者”として捉える一方、息子は母親との分離を試み、つながっている感覚を防衛的に否認する、と論じている。Chodorow は母娘の“地続きな一体感”について明確に提示した人物である。

自我理想の理論構築で知られているフランスの精神分析家 Janine Chasseguet-Smirgel (1928-2006) は、女性が去勢されて無力であると

いうフロイトの指摘とは正反対のイメージを幼い子どもは母親に抱く、と指摘している (Chasseguet-Smirgel, 1964)。彼女によれば、男であろうと女であろうと、子どもであろうと大人であろうと、本人が母親を潜在的に危険な対象と捉えていようが保護的な理想の対象と捉えていようが、いずれにしても母親というのは強韌な存在である (Chasseguet-Smirgel, 1993)。

Joyce McDougall (1920-2011) は、女性の身体的な構造として性器が隠されていることから、女兒は、その部位を視覚的に確認することができないと指摘し、さらに彼女は、女兒にとって赤ん坊の時から体験している性的感覚や興奮の源となる身体的な位置の理解が難しく、クリトリス、ヴァギナ、尿道などからの内的な刺激感覚がややあいまいになる、と指摘している (McDougall, 2004)。女性には去勢不安が生じないとフロイトは当時考えていたが、今ではこの考えは完全に反論されており、女性は、実際にはもっと激しくより浸透的な不安を、自身の性的興奮を抱く身体全体の“内的な空間”で感じている、と McDougall は反論している。

第二の波では、精神分析理論に反論や反発したり、活用したりすることで、フェミニズム運動が活発になった。そして、女性性の理解を周囲に付度せずには発言できる時代となった。この当ても精神分析の男根至上主義的な理論が継続していたからこそ、女性運動家たちは標的を描きやすく、その標的と闘う姿勢を原動力として団結し、フェミニズムのムーヴメントがより活性化した。それはある意味で、精神分析学がフェミニズム運動に対して、意図しない貢献をしたことになる。また、フェミニズムの運動があったからこそ、女性性の発達や女性の内的な体験が理論的に構築され、それまでの理論に修正が加えられ新たな理論が加わ

るきっかけとなった。それは、フェミニズム運動が精神分析学に対して、意図しない貢献をしたことになる。

この時期には女性同士による女性性の論争も見られた。その様々な論争から生まれたのが、ジェンダー・アイデンティティという新たな概念である。生物的な男女の区分に留まらない、さまざまなジェンダー・アイデンティティの概念的位置づけや許容が芽生え、それが現代のLGBTの社会的認知につながっていった。これは、ちょうど弱者に支援の手を差し伸べた Mother Teresa (1910-1997) に 1979 年ノーベル平和賞が授与された時期でもある。

3. 第三の波：共有期

第三の波は 1980 年代から 2000 年代に至るまで世界中で巻き起こった社会的な波である。象徴的な例としては国連がスポンサーとなって 1975 年から 5 年に一度開催されている World Conference of Women が挙げられる。バックラッシュによる後退の危険にさらされながら、女性の人権運動は継続されている。

1960 年代以降のアメリカの女性運動について、作家 Susan Faludi (1959-) は著書の「バックラッシュ—逆襲される女たち」(1991) で振り返り、女性の社会進出や社会的成功の弊害になったのはマスメディアである、と断言している。また、1970 年代における女性の地位向上の動きは、マスメディア主導によりバックラッシュ、つまり“巻き戻し”を受け、それが繰り返される危険を克明に紹介している。バックラッシュの全体的なストラテジーは、被害者である女性を非難し、その責任を女性に負わせるという巧妙な手口である。女性解放運動自体が 1980 年代の女性に様々なわざわいをもたらした、という歪んだ展開をしていると Faludi は論じている。さらに彼女は、女性に対す

るバックラッシュは、いつでも発生する危険性をはらんでいる、と 1991 年の彼女の金字塔的な著書で警鐘を鳴らしている。

また Judith Butler (1956-) は、第三の波を代表するフェミニスト思想家で、自らが同性愛者であると告白し、ジェンダーとセクシュアリティについて多角的に研究を推し進めた中心人物である。彼女は、それまでのフェミニスト運動が、性別とジェンダーという硬直化した二分化水準に留まっていることに反論している。さらに彼女が「異性愛は人為的につくりだされたものだ」と主張するクイア研究 queer theory の理論的支柱になったことで、LGBT への理解が世間に広まったのである (Butler, 1990)。

この第三の波は、女性運動と精神分析学が歩み寄る時期でもあった。その中でも、精神分析学をフェミニズムの中に取り入れて活躍する人々と、フェミニズムを精神分析学の中に取り入れて活動する人たちがいると考えられる。

Susie Orbach (1946-) は前者である。第 3 の波について Orbach (2018) は、その前の第二の波では、充分に実現できなかった ME TOO 運動が可能になったと述べている。彼女は、女性が自身の被害体験を隠蔽せずに発信する勇気を推奨し、弱者の立場を変える運動を支援してきた。彼女は精神分析家であり「Hunger Strike」や「Fat is Feminist Issue」など肥満を女性の問題として扱われていると論じた著書を書いている (Orbach, 2009)。彼女の書物は広くフェミニストたちに読まれているが、精神分析の方では、彼女の女性性に関する論文は滅多に引用されていない。彼女は、女性が父性支配主義的な物の考え方を吸い込むように育てられた際の結末について論じている。このように育った女性は自身のもろさなどに敏感になり、他者を支援することで自身の満たされない欲求を充足し、女らしく振る舞い、自身の

欲求に対しても、自身の身体に対しても、セクシュアリティに対しても、どこかぎこちない思いを抱く、と指摘している。

Jessica Benjamin (1946-) は後者である。彼女は、フェミニズムへの歩み寄りに最も貢献した精神分析家であり、フェミニズムやジェンダーを精神分析の中で位置づけていった。Benjamin は Chodorow と同様に、万能的な母親のパワーへの反乱及び分離の象徴としてペニス・エンヴィーを捉えており、前エディプス期における女兒の母親との関係を重視している (Benjamin, 1988)。さらに彼女は、伝統的なフロイト理論は不可避免的に父権制によるジェンダー関係を再生させ「支配と服従」「男性の論理性と女性の脆弱性」の二極が特徴であると指摘し、女性が自由を獲得するための奮闘について振り返っている。

この第三の波では、母-娘関係など、一個人から関係性自体に焦点が当てられ、異なる人種や異なるセクシュアルアイデンティティにも関心が向けられ、ファーリックな論考対象を基準とした議論に留まらなくなった。

精神分析学とフェミニズムの歩み寄りを後押ししたのは、国際精神分析協会の中に女性性に特化して議論をする組織 Committee on Women and Psychoanalysis (COWAP) が1998年に創設されたことにある。その組織的な取り組みも影響して、女性性の理論は厳密なフロイト精神分析的聖典から軟化することが許容された。例えば、100年前では認められなかった Hilferding の妊娠/出産/子育てにおける女性の肉体的存在の影響について、今では自然に受け入れられ、新しい理解として組み込まれるようになった。現在、COWAP は男性性や女性性の二極に留まらず、広くジェンダーの問題やセクシャルマイノリティも、テーマとして扱う会として発展している。

COWAP 設立に尽力した一人 Alcira M. Alizade

(1943-2013) は、McDougall のスーパーヴァイジーであり、ラテンアメリカ COWAP の共同委員長を1999年から5年間務め、全 COWAP 委員長を2001年から2005年まで務めた人物である。彼女は母親への羨望や、女性性の拒絶、性的マイノリティなどについて発信しつづけた。

彼女は、フロイトがペニスを引きつける女性器「ヴァギナ/子宮羨望」という考えに全く思いをめぐらさなかったことを指摘している。Alizade によれば、フロイトのフェミニズム論は、「見えているモノ=ペニス」が女性には「ないため」に嫉妬しているという考えに留まっている。女性の身体には、形が固定されていない流動的なものや、透明であったり、隠されていたりして「見えていないものが、存在する」という「秘められた神秘性」の魅力や危険なファンタジーを抱かせる力について、さらには赤ん坊を「包含/出産」する能力について、フロイトは言及できなかった、と Alizade は指摘している (Alizade, 2002, 2003; McDougall, 2004)。

Danielle Quinodoz (1934-2015) は、男児の去勢コンプレックスと同様に、女兒には女性性器切断コンプレックス female genitalia amputation complex が存在する、と論じている (Quinodoz, 2003)。Quinodoz は、女兒が自身の本当のアイデンティティを失う不安の背景に、性器が切断される不安よりも深刻な不安があると指摘している。彼女によれば、女性が自身の性器が切断される無意識的不安を抱く場合、少なくとも性器の“象徴化”は保持され、この“象徴化”機能があれば、女性としての身体性やイメージを抱くことができ、女性としてのアイデンティティの感覚は形成される。しかし、性器の存在自体を抑圧したり、否認したりして、自身のモノとして認識できない女性は、“性器によって象徴化する”機能が剥奪されており、たとえ無意識であっても切断の恐怖などは

抱かないまま、それより深刻な不安が生まれる、と Quinodoz (2003) は指摘している。

この場合、女性に性器に関する知的な理解があっても、体内の身体的な空想や象徴化ができず、女性としてのアイデンティティを伴った情緒や実感が持てずに、女性器を生命なき lifeless な花瓶や壺のように捉え、受け身的で制止したモノを入れる「モノ」として受け止める。その結果、どの対象とも生き生きとした交流が持てない“モノ＝女性器＝オンナ”となると Quinodoz は論じている。

第三の波では、社会学的視点、ジェンダーアイデンティティ、女子・女性の精神分析治療から導き出される新たな理論が女性性の理解に組み込まれていった。

4. 第四の波：発言期

第四の波は、21世紀に入ってから現在に至っている。ちょうど、Ellen Johnson Sirleaf (1938-)、Leymah Roberta Gbowee (1972-)、Tawakel Karman (1979-) から3名の女性たちが主張した「女性の安全及び平和構築活動に女性が全面的に参加できる権利を求める非暴力活動」を称え、2011年にノーベル平和賞が授与された直前から開始された。この受賞は、見過ごされてきた女性の苦悩と権利獲得に目が向けられた象徴的な意味も包含している。その影響が広がり、2014年には Malala Yousafzai (1997-) の「パキスタン児童と青年への抑圧に対する戦い及び児童の教育を受ける権利への貢献」が称えられ、さらに2018年には Nadia Murad Basee Taha (1993-) の「戦場や紛争において兵器として用いられる性暴力を終結させるための努力」が称えられ、彼女たちにノーベル平和賞が授与された。この授与にはこれまで、強者側が都合良く否認してきた弱者側の声無き苦しみに、彼女たちが被害者として声を上げたことで、世の中が動き始めた象徴的な意味が含まれる。

第四の波では、ソーシャルメディアを活用したジェンダーの平等性が発信されるようになった。人種差別を含む、全ての差別や不平等性の撲滅を目指した社会運動が、特に女性から発動されている。

しかし、精神分析学における女性性の解明は、まだ充分とは言い難い。Rafael E. Lopez-Corvo (1934-) は、女性の普遍的原理の存在を指摘し、女性が自己解明へと向かう道を塞ぐ障壁を見極め、自身に適したアイデンティティや特異性を見いだす必要があると指摘している (Lopez-Corvo, 2014)。

全ての女性が自責の念に駆られることなく、インプリンティングや生殖の力を行使する権利が与えられていることを自覚しはじめたときに、また嫉妬恐怖や罪悪感やマゾヒズムを抱かずにそれらを自身の内的な価値として見出し始めたときに、女性の真のアイデンティティが明らかになっていくであろう。たとえ、女性の内面が「謎の多い暗黒大陸」から多少は脱したとしても、女性の真のアイデンティティの到来まで、女性の体内に宿す心的空間は男性にとっても女性にとっても人跡未踏 terra incognita のままである。

引用文献

- Alizade, A.M. (2002) The fluidity of the female universe and its psychic consequence. In Embodied Female. Alcira Mariam Alizade (Ed). Karnac Books.
- Alizade, A. M. (2003) Studies on Femininity. Karnac Books.
- Appignanesi, L. (2008) Mad, Bad and Sad A History of Women and the Mind Doctors from 1800 to the Present. Virago Press.
- Balsam, R. (2015) The War on Women in Psychoanalytic Theory Building: Past to

- Present. *The Psychoanalytic Study of the Child*, Vol. 69.
- Beauvoir, S. (1949) *Le Deuxième Sexe*. Gallimard.
- Benjamin, J. (1988) *The Bonds of Love: Psychoanalysis, Feminism and the Problem of Domination*. Pantheon.
- Bertin, C. (1982) *Marie Bonaparte A Life*. Yale University Press.
- Bonaparte, M. (1949) *De la sexualité de la femme*. *Revue Française de Psychanalyse*, Vol.13.
- Borch-Jacobsen, M. (2012) *Os Pacientes de Freud - Destinos*. Texto & Grafia.
- Brownmiller, S. (1975) *Against Our Will*. Simon & Schuster.
- Butler, J. (1990) *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. Routledge.
- Chasseguet-Smirgel, J. (1964) *Recherches psychanalytiques nouvelles sur la sexualité féminine*. Payot.
- Chasseguet-Smirgel, J. (1993) *Woman's Social Status as a Reflection of the Internal Relationship to Mother and Father in Both Sexes*. *International Forum of Psychoanalysis*, Vol.2.
- Chodorow, N. (1978) *The Reproduction of Mothering. Psychoanalysis and the Sociology of Gender*. The University of California Press.
- Chodorow, N. (1989) *Feminism and Psychoanalytic Theory*. Yale University Press.
- Cormican, M. (2009) *Women in the Works of Lou Andreas-Salome*. Camden House.
- Cromberg, R. U. (2010) *Primeiras Psicanalistas*. *Persurso*, 45.
- Deutsch, H. (1925) *Psychoanalysis of the Sexual Functions of Women*. Edited by Paul Roazen. Translated by Eric Mosbacher (1991). Karnac Books.
- Deutsch, H. (1930) *The Significance of Masochism in the Mental Life of Women*. *International Journal of Psychoanalysis*, Vol.11.
- Doolittle, H. (1956) *Tribute to Freud. A New Direction Book*.
- Eissler, K. R. (1974) *On Mis-Statements of Would-Be Freud Biographers with Special Reference to the Tausk Controversy*. *International Review of Psycho-Analysis*, Vol.1.
- Faludi, S. (1991) *Backlash: The Undeclared War Against Women*. Chatto & Windus.
- Freud, A. (1965) *A la mémoire de Marie Bonaparte (1)*. *Revue française de psychanalyse*, Vol. 29.
- Freud, S. (1925) *Some Psychical Consequences of the Anatomical Distinction between the Sexes*. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Vol. XIX.
- Freud, S. (1926) *The Question of Lay Analysis*. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Vol. XX.
- Freud, S. (1931) *Female Sexuality*. *The Standard Edition of The Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Vol. XXI.
- Freud, S. (1938) *An Outline of Psycho-Analysis*. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Vol. XXIII.
- Friedman, S.S. (2002) *Analyzing Freud. Letters of H.D., Bryher and Their Circle. A New Direction Book*.
- Geissmann, C. & Geissmann, P. (1992) *Histoire de la Psychanalyse de l'Enfant*. Bayard Press.

- Groth, J. (2015) Eugenia Sokolnicka - A Contribution to the History of Psychoanalysis in Poland and France. *Psychoanalysis and History*, Vol.17.
- Groves, E.R. (1944) *The American Woman. The Feminine Side of a Masculine Civilization*. Emerson Books.
- Horney, K. (1922) Bericht über den VII. Internationalen Psychoanalytischen Kongreß in Berlin (25.-27. Sept. 1922). *Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse*, Vol.8.
- Horney, K. (1926) *The Flight from Womanhood: The Masculinity-Complex in Women, as Viewed by Men and by Women*. *International Journal of Psychoanalysis*, Vol.7.
- Hug-Hellmuth, H. (1920) Abstracts of the Proceedings of the Sixth International Psycho-Analytical Congress—Held at the Hague, September 8th to 12th., 1920. *Bulletin of the International Psycho-Analytic Association*, Vol.1.
- Jones, J. (1961) *The Life and Work of Sigmund Freud* Vol.2. Basic Books.
- Lampl-de-Groot, J. (1928) *The Evolution of the Oedipus Complex in Women*. *International Journal of Psychoanalysis*, Vol.9.
- Lampl-de-Groot, J. (1933) *Problems of Femininity*. *Psychoanalytic Quarterly*, Vol.2.
- Lampl-de-Groot, J. (1982) *Thoughts on Psychoanalytic Views of Female Psychology 1927-1977*. *Psychoanalytic Quarterly*, Vol.51.
- Livingstone, A. (1984) *Lou Andreas Salome Her Life and Writings*. Gordon Fraser Gallery.
- López-Corvo, R. E. (2009) *The Woman Within*. Karnac Books. (訳：内なる女性 ラファエル・E・ロペス-コルヴォ 井上果子監訳、飯野晴子・赤木里奈・山田和子訳 2014 星和書店)
- Masson, M. J. (1984) *The Assault on Truth*. Harper Perennial.
- McDougall, J. (2004) *Female and Female Sexualities*. In *Dialogues on Sexuality, Gender and Psychoanalysis*. Irene Matthis (Ed). Karnac Books.
- Morgenstern, S. (1939) *Le Symbolisme et la valeur psychanalytique des dessins infantiles*. *Revue Française de Psychanalyse*, Vol.11.
- Mühlleitner, E. & Reichmayr, J. (1997) *Following Freud in Vienna: The Psychological Wednesday Society and the Viennese Psychoanalytical Society 1902-1938*. *International Forum of Psychoanalysis*, Vol. 6.
- Orbach, S. (2009) *Bodies*. Picador.
- Orbach, S. (2018) *And Then There is Oedipus*. *Contemporary Psychoanalysis*, Vol.54.
- Quinodoz, D. (2003) *A particular kind of anxiety in women - it's nothing at all, really . . . (and doubly so)*. In *Studies on Femininity*. Alcira Mariam Alizade (Ed). Karnac Books.
- Richards, A. K. (1992) *Hilda Doolittle and Creativity—Freud's Gift*. *Psychoanalytic Study of the Child*, Vol.47.
- Richards, A. K. (2019) *What Women Want and What is Wanted of Women*. Paper Presented at Committee of Women and Psychoanalysis of the International Psychoanalytic Association Conference : 『What Do Women Want Today?』 November 2019.
- Riviere, J. (1922) *The Private Character of Queen Elizabeth*. *International Journal of Psychoanalysis*, Vol.3.
- Riviere, J. (1929) *Womanliness as a masquerade*. In A. Hughes (ed.), *The Inner World and Joan*

- Riviere: Collected Papers, 1920-1958. Karnac Books.
- Schafer, R. (1974) Problems in Freud's Psychology of Women. Journal of American Psychoanalytic Association, Vol.22.
- Schultz, D.P. & Schultz, S.E. (2009) Theories of Personality 9 th Edition. Wadsworth Cengage Learning.
- Silva, M. V. N. & Espirito Santo, É. S. (2015) A História das Primeiras Mulheres Psicanalistas do Início do Século XX. História, Histórias. Revista do Programa de Pós-graduação em História, Vol.3.
- Sokolnicka, E. (1922) Analysis of an Obsessional Neurosis in a Child. International Journal of Psychoanalysis, Vol.3.
- Spielrein, S. (1912) Die Destruktion als Ursache des Werdens. Jahrbuch für psychoanalytische und psychopathologische. Forschung, Vol.4.
- Spielrein, S. (1913) I. Beiträge zur Kenntnis der kindlichen Seele. Zentralblatt für Psychoanalyse, Vol.3.
- Spielrein, S. (1931) Kinderzeichnungen bei offenen und geschlossenen Augen. Zeitschrift für Psychoanalytische Pädagogik, Vol.5.
- Spielrein, S. (1994) Destruction as the Cause of Coming Into Being. Journal of Analytical Psychology, Vol.39.
- Springmann, L. (2018) Briefe an Jeanne Lampl-de Groot 1921-1939 [Sigmund Freud—Letters to Jeanne Lampl-de Groot 1921-1939], by Sigmund Freud. International Journal of Psychoanalysis, Vol.99.
- Stein, C. (1961) La castration comme négation de la féminité. Revue Française de Psychanalyse, Vol.25.
- Thompson, N. L. (1987) Early Women Psychoanalysts. International Review of Psycho-Analysis, Vol.14.
- Van der Veer, R. (2011) Tatyana on the Couch: the vicissitudes of psychoanalysis in Russia. In Sergio Salvatore & Tania Zittoun (ed.). Cultural Psychology and Psychoanalysis: Pathways to Synthesis.
- Vickers, J. (2008) Lou von Salome A Biography of the Woman who inspired Freud, Nietzsche and Rilke. McFarland.
- Wermuth-Atkinson, J. (2012) The Red Jester: Andrei Bely's Petersburg as a Novel of the European Modern. LIT Verlag.
- Wrye, H. K. (2009) The Fourth Wave of Feminism: Psychoanalytic Perspectives Introductory Remarks. Studies in Gender and Sexuality, Vol.10.
- Young-Bruehl, E. (1990) Freud on Woman. Norton.
- Young-Bruehl, E. (1998) Subject to Biography. Harvard University Press.
- Zilboorg, G. (1944) Masculine and Feminine. Some Biological and Cultural Aspects. Psychiatry, Vol.VII.

付記

本論文の作成にあたり、貴重なご指摘をくださった板橋登子先生および田村和子先生に厚く御礼申し上げます。